



リステラス星圏史略
古資料ファイル



3 - 5 - 9

『出立の類型』

(発掘作業中)

霧樹里守

is 土岐真扉

as 柊実真紅

『 その話の続きを。 』

『 その話の続きを。 』

次回の講談社児童文学新人賞への投稿作のタイトル決まった。 (2018年8月14日)

<http://85358.diarynote.jp/201808150547094972/>

[メモ 『その話の続きを。』 \(日付修正+あるふぁ\)](#)

2018年8月14日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(5\)](#)

—
次回の講談社児童文学新人賞への投稿作のタイトル決まった。

=====

中2でイントロだけ考えて、どうしても「その続き。」を

想像（創造）することができなかった...

その続き。

今なら、書ける。

コメント



[霧木里守≡畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2018年8月15日5:48

「進道ナツキさんね？ お母さまから検索願いが出ています。」



[霧木里守≡畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2018年8月15日5:49

↑

...って、「欠けてた部分」のビジョンまで唐突に視えたのでw

勝手に主人公の名前まで決まったw w w w w ナツキてw w w w w

『電話は通じない。』

『電話は通じない。』

◎タイトル未定。透子先生シリーズ。...に、なったらどうしよう...★ （高校かな？）

◎タイトル未定。透子先生シリーズ。...に、なったらどうしよう...★ （高校かな？）

2016年8月18日 リステラス星圏史略 （創作）

◎タイトル未定。透子先生シリーズ。...に、なったらどうしよう...★

主人公、梨野透子。24～5歳。中学校教師。

なにやら荒んだ感じの下街に長欠児童の家庭訪問に行く。

その際、日本は金持ち国だと言うけどウソだなあ...と、友人のみやげにもらったスイス時計を見てため息をつく。

なにが起きたのかも解らないうちに失業中の父親狂乱、という家庭内暴力の現場に立ちあうハメになる。

透子先生の教え子である まりかが殴られ、兄が割ってはいって乱闘となり、母親たるハデな化粧のおばちゃんは「人殺し！」とわめくばかりである。

かろうじて兄が父親を殴りたお七、
とめに入った透子も殴られ、ついでにテレビを破壊する。

一瞬の沈黙に、母親は透子をなじった。

「ガッコの先公なんぞ、←ちききば←っかりでロクなことしやしない！」

娘にはやく"店"に出て...なぞと続ける親に、あたまにきた透子は、たんかを切って、まりかの手をひいて帰る。

翌朝、学生時代の親友、あき子に起こされる。

「なにをまた、いたいけな美少女つれこんで...」

「教え子だっ！」

(あき子は仕事で完徹すると仮眠をとりによところがりこんでくる。)

「体制批判のうたに、みんな、拍手をくれちゃうんですね」

...一瞬、言葉にならない、生徒会役員たち...

「電話は通じない」 (柘実真紅)

「電話は通じない」 (柘実真紅)

2016年8月18日 リステラス星圏史略 (創作)

電話は通じない

柘実真紅

県道をはしりぬけるやせた猫の鋭い眼。

いろあせた自衛隊募集の広告。

あまり冷えていない缶ジュースを買って、道をたずねたトタン葺きのよろず屋の片隅には、去年、おとし、その前と、ひからびた死体のひからびたゴキブリホイホイが、何個も蹴りこまれて溜まっていた。

...重たいほこりに西陽。

「六時、かぁ」

同僚が円高便乗ツアーのみやげとかでくれたスイス時計に目をやって、さっぱりした身なりの透子はため息をつく。

夏休み前ともなれば陽が落ちるまではまだしばらくあるけれど。

私鉄のガード下に夕暮れどきの涼をもとめて、ぬるんだアクエを飲みほす。

空きカンの処分にも困っても当然ゴミ箱などなく、とって道ばたのガラクタの山にまぜこむのも気がひけて、結局、しずくをよく切って縦にしてカバンに入れた。

高い音。

満員電車が傾いて頭のうえを駆けぬける。

軒を寄せあうような下町の宅地街の、目につくのは割れたガラス、首のとれた電池のぬいぐるみ。

くもが巢をはった盆栽のたな。

~~"親切・安心"のポスターの上から黄色いペンキで脅迫文句を書かれてしまった板べいがある。~~

となりに町工場は赤さびたまま、当分休業のはり紙が雨に汚れて斜めにかしいでいる。

どこかで赤ん坊の泣き声。

叱りつけ、怒鳴りながら、ひっぱたくらしい鋭い響き。

さらに泣く赤ん坊。

暑さが、じつとりと増すようだ。

角をまがると細い路地いっばいに、うち捨てられたブラウン管の破片が、なかば土に踏みこめられて散らばっていた。

透子は覚えてきた地図をくりかえす。

ゴミの曜日を指定した立て札のとなりに西浦の表札は出ていた。

テレビの音。

鳴らないチャイムに業を煮やした三度目のノックで、合板のドアはようやく開けられた。

「生命保険ならいらないよっ！」

まず、わめく。

「ジャマしないでくれ、これから店だつてのに…」

「はじめまして。岸田透子と申します。こちらの真由美さんの担任をしている者ですが。」

ピンカールをいっばいつけた母親はふっと黙りこんで透子の風体をながめた。

夏のブラウスにスカートは紺のタイト。

白茶の大きなショルダーをさげて、髪形も今日は手頃にまとまっている。

「まゆみの... ガッコウのセンセイ？」

目の下にクマのある化粧前の顔がかすかに汚いものを見たようになり、

「まだ、帰ってないんですがね」

ドアのノブをがっちり握ったまま言った。

「え...」

「家庭訪問ならちゃんと先に連絡もらわないと、こっちにも都合ってもんが...」

「まゆの先生だって？」

奥から出てきた男はしわのよったスエットを着て、かなり赤い顔をしていた。

「やーやー、お世話になってます。どうですか、まゆが帰ってくるまで中で一杯...」

「あんたはすっこんでなっ！」

「帰って... ないって...」

「ただいま」

カタカタと重い学生カバンが走ってくる足音がした。

「ごめんね、遅くなって、すぐ食事」

「まゆみ。家庭訪問のプリントなんでよこさない?!」

「えっ?!」

透子はのろのろふりむいた。

「にしうらまゆみ、あなた毎日どこへ行ってたの」

「先生...」

真由美は赤くなって蒼くなった。透子はしばらくぼうっとしていて、狭い路地裏はもう日差しの陰にはいったようだった。

母親が不承不承といった態（てい）で散らかった部屋に透子を招じ入れ、ちょっと"店"に連絡をいれるからと十円にぎって隣の家まで電話を借りに行く。

「どうぞ、先生」

真由美は困った顔でお茶を入れ、大ぶりの椀をごっつりと不器用に置いた。

テレビの音が気になる。

父親は妙に呆けた表情で、教師の相手をするでもなく、定位置なのだろうその前に肩をまるめて座りこむ。

足元には溜まった灰皿、首を振っている扇風機。

ビールの大瓶。

「電話、どうしたの」

透子が訊く。

「えと...」真由美はすこしためらう風で、

「お金、払ってないんで停められちゃったの。あたし長電話したから...」

新潟と、だと言う。二時間も話しこむほどの友達がいたのかと、そもそもこの子がそんなに喋るのかと、透子は内心かなり意外に思ったが、その沈黙をどう釈（と）ったのか、

「うち、銀行振込みにしてないんです」

真由美はぼつりと落とした。

西浦真由美は長めのおかっぱ頭をした目立たない大人しい、成績は中の上という生徒で、この春クラス編成があってから今まで、とりたてて注意を払ったこともなかった。

しいて言えば図書室の常連らしいということ、透子が顧問をしているマン研の幽霊部員だったこと、くらいだろうか... それも、この件があってはじめて知ったことではあったが。

二週間の無断欠席、電話も通じずに、たまりかねて訪ねてきた結果がこれだ。

戻ってきた母親はむっつりと黙りこんで透子がなにか言うのを待っている。

言葉に、困った。

出席率の内申への影響とか、思春期だの非行へ走る心配だの...

とおりにっぺんの浅い科白（セリフ）しか吐けない自分が情けなかった。

テレビのなかで観客のいっせいに笑いころげる声。

"T町の子供は"と、職員室でささやかれる通説に、これまで透子は耳を借さないできた。

家庭環境。

それは、偏見だと思う。でも。

子供は親をみて育つのだ。水商売で夜はいない母、教師が来たというのにTVに見入って反応しない父...

ふと真由美に注意を戻すと、じっと自分の手のひらを見ていた。

自動車にぶつかられた跡もくっきりと、放置されて何年も壊れたままのブロック塀の残骸。

県道をはしり抜ける猫の痩せた眼。

はがれかけた爆弾犯人のポスターのうえに、妙にいろあざやかなテレクラだの、ソープだの、たてもななめも関係なく貼られたとりどりのチラシ類。

珍奇な文字使いの暴走族のマーク。が、~~それこそ犬の小便のように無数に描きちらされている。~~

すきまを縫うように放映禁止のうずまきだか幼稚園児の太陽だかのラクガキや、稚拙なヒワイ画がおどる。

湿った暗いガード下をくぐり抜けると、ようやく、透子はおしえられた一画についたのだった。

「六時か...」

同僚が円高便乗ツアーのみやげにくれたスイス時計に目をやって、さっぱりした身なりの透子はため息をつく。

夏休みの補習期間中ともなれば陽が落ちるまでにまだだいぶあるけれど。

「日本が金持ちだっていうの、半分はウソよねえ...」

地上げとサラ金。

暴力団の利権がからんだこのあたりを夜にうろつくのはいただけない。

電柱の番地をたよりに、透子は一軒一軒、路地裏の小さな表札を捜してまわった。

県道をはしりぬける痩せた猫の鋭い眼。

自動車にぶつけられた跡もくっきりと、放置されて何年も壊れたままの煙草屋のブロック塀。

はがれかけた爆弾犯人のポスターのうえにはみょうに色あざやかなテレクラだのソーランドだのたてもななめも関係なく貼られたとりどりのチラシ類。

すきまを埋めるように放映禁止のうずまきやら、稚拙なヒワイ画がおどる。

いろあせた自衛隊募集の広告。

人家のドアも窓も無視した巨大な暴走族マーク。

...あまり冷えていないジュースを買い、道を尋ねた昔ながらのよろず屋風の店の一隅には、去年、おとし、その前と、ひからびた死体のひからびたゴキブリホイホイが、何個も蹴りこまれて溜まっていた。

「六時かぁ」

同僚が円高便乗ツアーのみやげにくれたスイス時計に目をやって、さっぱりした身なりの透子はため息をつく。

夏休み前の補習期間中ともなれば陽が落ちるまではまだだいたいしばらくあるけれど。

私鉄のガード下に黄昏どきの涼をもとめて、ぬるんだアクエを飲みほす。

空カンの処分に困っても当然ゴミ箱などなく、とって道ばたのガラクタの山にまぜこむのも気がひけて、結局、しずくをよく切って縦にしてカバンに入れた。

電柱の番地がようやく目的の町内になる。

ゴミゴミと軒を寄せあうような下町の宅地街の、目につくのは割れたガラス、首のとれた電池の人形。くもが巣をはった荒れはてた盆栽のたな。

~~このあたりは地上げとサラ金と、暴力団の利権のからんだ"冷たい戦争"があると職員室のうわさに聞いた。泣きながら転校していった何人かの他級の子供たち。そして...~~

~~"親切・安心"のポスターの上から黄色いペンキでとりたての脅迫文句が描かれた、板べいの隣の家に目ざす表札をみつけて少しばかりほっとする。~~

~~「ごめんください！」~~

~~三度ほど押してみても、ドアチャイムは壊れているようだった。~~

"親切・安心"のポスターの上から黄色いペンキで脅迫文句を描かれてしまった板べいがある。

となりの町工場は赤さびたまま、当分休業のはり紙が風にゆれている。

どこかで赤ん坊の泣き声。

叱りつけ、怒鳴りながら、ひっぱたくらしい高い音。

さらに泣く赤ん坊。

暑さが、じっとりと増すようだ。

角をまがると子供も遊ぶだろう細い路地いっばいに、うち捨てられたテレビのブラウン管の破片が、なかば土に踏みこめられて散らばっていた。

...そばで、子供らが、遊ぶのだろうに。

透子はため息をつき、頭のなかで覚えてきた地図をくりかえす。

『古紙回収』の立て札のとなりに西浦の表札は出ていた。

壊れていたドアチャイム。

ごうを煮やした三度目のノックで安物のベニヤの合板のドアはようやく開けられた。

「生命保険ならいらないよっ！」

まず、わめく。

「ジャマしないでくれ、あたしゃこれから店に...」

「はじめまして。岸田透子と申します。西浦真由美さんの担任をしている者ですが」

ふいをつかれた態でピンカールをいっぱいつけた母親は、透子の顔を見ていた。風体を眺めた。

「まゆみの... ガッコウのセンセイ？」

目の下にクマのある化粧前の顔がかすかに汚ないものを見たようになる。

「まだ、帰ってないんですがね」

ドアのノブをがっちり握ったまま言った。

「家庭訪問ならちゃんと先に連絡をもらわないと、こっちにも都合ってモンが...」

「まゆの先生だって？」

奥から出てきた男はまだ陽（ひ）もあるうちだというのにしわのよったスエットを着て赤い顔をしていた。

「やーやー、お世話になってます。どうですか、まゆが帰ってくるまで中で一杯...」

「あんたはすっこんでなっ！」

「帰って... ないって...」

「ただいま」

カタカタと重い学生カバンが走ってくる足音がした。

「ごめんね、遅くなって、すぐ食事...」

「まゆみっ家庭訪問のプリントなんでよこさない?!」

「えっ!？」

透子のはろのろふり向いた。

「西浦真由美ニシウラマユミにしうらまゆみ、あなた毎日どこへ行ってたの」

「先生...」

真由美は赤くなって蒼くなった。透子はしばらくぼうっとしていて、何がどうなっているのか、よく解っていなかった。

母親が不承不承といった態で散らかった部屋に透子を招き入れる。

途中でほうりだした化粧台。胸のあいた黒いドレス。

ちょっと"店"に連絡をいれるからと十円にぎて母親は隣の家まで電話を借りに行く。

いくらかけても通じなかったのも道理で、自分のところのは料金滞納でひと月ほども止められた使えないままなのだ。

「どうぞ、先生」

真由美は困った顔でお茶を入れ、家庭科のお作法どうりに大きな椀をごつとりと不器用に置いた。

父だけが妙に愛想がいい。

下手に出るまうにどうもどうもと一心に頭をさげて、ビールのコップを透子がことわると、自分だけ何杯も何杯も手酌で飲み干している。

何杯も何杯も。~~クーラーのない暑い部屋からどこかへ逃れるように。~~

~~奥の部屋で制服を着換えて台所に真由美が立ち、母親が戻ってくると透子の向かいに坐った。~~

~~なんとか教師らしくしようと唇をなめて透子は言葉を探した。~~

~~西浦真由美は目立たない大人しい長めのおかっぱ頭の少女で、少しは成績もよく、~~

奥の部屋で服を着換えて台所に真由美が立ち、母親が戻ってきて透子の向かいに坐った。

なんとか教師らしくしようと場ちがいに正座をした透子は言葉を探す。

西浦真由美は長めのおかっぱ頭をした "目立たない" 大人しい生徒で、成績は中の上。

この春クラス編成があってから今まで、とりたてて注意を払ったこともなかった。

無届けの欠席が十日ばかりも続いている。

「最初はてっきりはやりの夏カゼだと思っていたものですから...」

やがて心配になり、電話をしてみても、通じない。

やむを得ず直接出向いてきた結果が、こうだった。

「どうもすみません。すみませんね、先生」

話の途中からコップを握りしめた父親が赤い顔をしてしきりに首をかがめる。

岸田透子

西浦真弓

西浦真由美

高田かなえ 可名得

可名絵

...不利な生き方を強いられている者たちの、ぬくぬくした存在への、火を吹くような憎しみ...

二週間の無断欠席。電話も通じずに、たまりかねて訪ねてきた結果がこれだ。

戻ってきた母親はむっつりと黙りこんで透子がなにか言うのを待っている。

言葉に、困った。

「最初は、風邪だと思っていたものですから、ちょうど夏カゼはやってましたし...」

テレビのなかで観客の笑いころげる声。

"T町の子供は"と、職員室でささやかれる通説にこれまで透子は耳を借さないできた。

家庭環境。

それは、偏見だと思う。でも。

子供は親を見て育つのだ。水商売で夜はいない母親、教師が来たというのにTVに見入って反応しない父を...

ふと真由美に目を戻すと、じっと自分の手のひらを見ていた。

「とにかく、二年生とはいえ出席率は内申にかかわってきますし、御家族でよく話しあって頂いて...」

「非行、というのは真由美さんの場合あまり考えられないことだとは思うのですが、どこかへ行きたいとか学校に出たくないとかは思春期にはよくあることで、現に私にも覚えがありますし...」

(近松あや子。中学生。) (たぶん中学3年)

(近松あや子。中学生。) (たぶん中学3年)

2016年8月17日 リステラス星圏史略 (創作)

...S. 1. ...

近松あや子。中学生。

元はおしゃべりでよく笑う、にぎやかな女の子だったが、中2の半ばごろからがんとして口をきかなくなった。

3年になって、生徒をぶんなぐったかどで回されて来た体育教師の担任に入る。

2学期も終りになって、先生に非常に頭来る事があって、強談判しようとして下宿に押しかけ、かくれていると、つい出そこなうままに先生のかいねこ"ちゃまつ"への独り言を聞いてしまう。

そして3学期、春も近づく頃...試験間際... あ～やを呼びだした生徒指導の先生が、近松おまえ変なことされなかったかと聞く。

何事かと思うと、担任の下宿で深夜遅くまで近松と話している声がするという。

思わずふき出しそうになったあ～やは、

「先生！それ、猫です！」

あとは一気に...カウンセラーとは親しかったので...

先生の猫に対する習性をしゃべってしまい、いつの間にやら現れた担任が「なんだ、近松、おまえなんでそんな事を知ってたんだ。」

あ～やは「先生、あたし先生の家へ行っただけです」。

口を開いてしまったことで長い間わだかまっていたあ～やの心の中の、なんでもないものが氷解し、一週間後、あ～やは拒みつづけていた高校の入学願書を持って職員室

へ行く。

(草稿 & 没原稿)

(草稿 & 没原稿)

(夢記録) (男3人、女1人。あとは適当に考えよう。) (1982?)

(夢記録) (男3人、女1人。あとは適当に考えよう。) (高校?)

2016年8月12日 リステラス星圏史略 (創作)

男3人、女1人。あとは適当に考えよう。

男、結き徹也、森男。シン。

女...鈴木よう子。

主人公、一応、森男ね。

~~高校時代の同級生であり、同じ運動部だった徹也と森男。徹は途中でぎふの方へ引越~~
~~し、その頃まだ友人にしかすぎなかったよう子が受験の時、大学でそっちの方へ~~
~~行く。→~~

2人して帰せいで来た時にはしっかり婚約している。

森男「実は、俺は... ちきしょう」

徹 「そんな...。それ、お前からよう子に言うべきだよ。言え。言わなきゃいけない」

~~よう子の人格もあって、一応、かたはついたように見える。~~

(森男のこったから、徹のこの一言で、何も云わずに引っこんじまったろう)

→中学時代。徹とよう子の父親が同じ会社で、新しくできたぎふ支社へ相ついで栄転。
よう子が先に引越して来て、休暇に徹が遊びに来るまで婚約のことを黙っていた。

で、そーゆう話をベースに、森男は美大行って染色科。写真やってるシン(信)と友人になる。はっきり言って2人と森男の交流は無くなっている。

ある日何かの理由で病院に行った森男とシンは「結婚前の健康診断」に来ていたよう子とばったり出くわし、森男の態度をいぶかるよう子にシンは「こいつの間ふられたばっかで」と言って切りぬける。⇒徹は親父の後をつぐために界者でかなり高い地位についている。で、彼も結婚式を地元で上げるために帰省して来る。少しも変っていない。⇒これを聞いとるんで話が少々にぶい。

森男は大事な個展(なり展覧会)をひかえている所だった。ところが突然、何もつくれなくなり、「徹が見に来るって言ってるんだぞ。俺の染める色染める色全部がよう子を愛してるとしか言ってねえってのに」。

「んな事わかるもんかね」

「解っちまうんだよ。あいつには...」

深夜の裏通り。わびしい屋台の赤ちようちん。男2人。

(舞台。喫茶店かスナックの風景。) (保土ヶ谷時代?)

(舞台。喫茶店かスナックの風景。) (保土ヶ谷時代?)

2016年8月25日 リステラス星圏史略 (創作)

舞台。喫茶店かスナックの風景。

中央やや左から右手壁まで木製のカウンター。

スツール椅子が4つくらい並んでいる。

(手前にボックス席3つ4つある設定だが、広さによっては作らなくてよし。)

左手サ店の出入り口から袖までは1 mくらいの間がある。

ドアは洒落た作りの木製。

ドアとカウンターの間は斜めになっていて、大きなガラスばりのウィンドー。

そこにも1つボックス。

(上手ソデよりここへ抜けられる通をを作っておく。)

カウンターの下手はしレジとくぐり戸。

上手壁にあっさりしたテーブルライトひとつ飾りについている。

ドア、ソデから開閉もできる仕掛け。カウベル。

(上手ソデよりカウンターへ、マスター登場。グラスをみがきはじめる。)

(ドアひとりでひらき、カウベルの音。)

マスタ： いらっしゃいませ。

ウヰトル： いらっしゃいませ。

(上手ソデから慌てて出てきて) ご注文は？

(オーダーをとるジェスチャー。マスターに伝え、運んできて置く。)

(※ボックス席なしの場合は、すべてマイムだけでもよい。)

(そうしている間に)

マスタ： 950円でございます。

(ドアひらく。)

ウェイツ： ありがとうございますア！

(効果音：アベックの笑い声が遠ざかっていく。)

マスタ： やれやれ。混みだす前にすこし一服したら？

ウェイツ： はあい。(出て行った客のテーブルを片付けてカウンターへ。)

(間)

(ドア開き、女1、顔だけのぞかせる。)

女1： かおるは？

ウェイツ： え？

女1： かおる来ています？

ウェイツ： え...ええ〜と、今いるお客様はこれだけですけれど。

女1： そう。(室内に入り、慣れたようすでカウンター一番奥の席に腰をおろして) ミルクティー。

マスタ： 失礼ですが、その席は、お客さま、

女1： かおるの席よね。

ウェイツ： え？

マスタ： ええ。そうです。

女1： かおるがいつも座る所って、ここなのね。ふうん。そう。

マスタ： （茶わんを洗いはじめる。）...良く見えるでしょう？

（間）

女1： ええ... 本当にそうね。

ウェイリス： ...あの... 何がですか。マスタ。

（間）

女1； お店の申がよ。世界中がよ。かおるを大事にしてくれる...
世界中がよ。

ウェイリス： はあ... （自分で紅茶を入れ、出す。）

女1： （唐突に）あなた、最近入った人？

ウェイリス： （うなづく。）

女1： かおるを知らない人って... いるのね。

（ドアひらく。）

マスタ： ありがとうございます。

（くぐり戸を抜けてテーブルをかたづけに行く。レジで会計して、再び皿洗いに戻る。）

（ドアひらく。）

ともこ： マースタツ ☆

のりこ： うわぁ寒いっ！ 寒かったのおっ！

ゆうこ： ブレンドコーヒーちょおだあい、マスタ。うんと暖ったかいやつねっ！

マスタ： 舌をやけどしますよ。

(ともこ、のりこ、ゆうこ、女1を見てハッと、やがて疑いぶかそうに、行こうとしていたいつものカウンターではない、ウィンドー下のボックスに腰をおろす。)

(マスタ、しらぬ顔。ウエイツちょっとおどおどしてブレンドをはこぶ。)

ともこ： (声をひそめて) え、だって... 年がちがうじゃない。そりゃ似てるよ。あの頃のあたしたちくらいよ。

~~のりこ： 28〜9に見える。~~

のりこ： 今ごろあの彼女がいるわけないわよお。

ゆうこ： でも... ホントに似てるわ。3つくらい、お化粧品でごまかせるかもしれない。

のりこ： おけしよー、してないよ。

(ドアひらく。)

たつお： やっ。おまっとおっ！

(女1に気づき、3人と同じ反応)

たつお： どしたの？ 彼女。今ごろ。

ゆうこ： あなたもそう思う？

たつお： え？

ともこ： あの人... 彼女だと思う？

たつお： だって。そうだろ。他にどう...

(すばやく首をめぐらせる。間。)

ウヰトル： ご注文は？

たつお： あ、わりい。いつものやつ。

ウヰトル： コーヒーですね。

ともこ： も、よそおよ、気にすんの。他人の空似かもしんないし。もし彼女だとしてもここに入ったのきっと偶然なんだろうし、さ。

のりこ： 昔と同じ手を使うわけね。

たつお： イヤなやつは無視するに限るのさ。

ゆうこ： ...でも。あれからもう3年もたったのよ。

ともこ： 3年でも10年でも。いやなやつはいやなやつよ。変わりゃしないわ。

たつお： それよかさ。聞いてくれよ。今日の講義さ、ひでエたらねえの。ますお教授がさあ...

(ドアひらく)

女3： ちは一っ!! あれ、どないしたんおたくら? ~~いつもと~~まえと席ちゃうじゃんっ!

ともこ： ま、ちょっとね。

女3： かおる来てない?

ゆうこ： (ちらっと女1の方を気づかって) かおるは... 最近ここにはこないわ。

女3： そっか。あたしもここんとこ、こことこの店にはごぶさただもんね。じゃ、また。

(ドアとじる)

女3： あ一っ。ほるみ!よしゆき! ひっさしぶり一っ! ねえねえ、かおる知らないっ?

(退場)

たつお： ...あーかわらずにぎやかーっ

のりこ： あのどこ行ったんだっけ？

ともしこ： さあ。

ゆうこ： OO女子大よ。

女1： （遠く。） マスター。わたしはいつもここへ来たかったわ。

（ボックスの4人、ぎょっとしたように首をまわす。）

女1： わたしいつもここへ来たかったの。学校の行き帰り、いつもそこの窓からこのお店をのぞいてたの。目立たないよう、わざと急ぎ足で顔そむけるようにして。ノートひらいたり単語カードめくったりしながら。

いつも横目でこのお店をながめていたの。

（4人、つつきあって、そそくさと席をたつ。）

~~ゆうこ： やっぱり~~

ともしこ： 出よ。

たつお・のりこ： ん...

ともしこ： マスター。ツケといてね。

マスタ：

ゆうこ： やっぱりそうなんだわ。やっぱり...

（ドアしまる。）

(発掘作業中) 「かおるは泣いていたわ。あなたのせいよ。」 (戯曲とか? 没めも断片) (保土ヶ谷時代?)

(発掘作業中) (戯曲とか? 没めも断片) (保土ヶ谷時代?)
2016年8月18日 リステラス星圀史略 (創作)

女2 : あたしは...歩いていた。歩くしかなかった。
何故ってあたしは、道の上にいるから。

女1 : かおるは泣いていたわ。あなたのせいよ。
あなたが裏切ったのよ。

女2 : ...だけど、それは...
...そう...ね... そうなのね。(遠く)

女1 : あなたには結局なにも解っていないんじゃないの。

女2 : (1人言で) そんな.....。(絶望)

女1 : とにかくあなたがそうしてそこにいる以上、あたしが出ていくしかないわ。

(ボタンとドアが閉まり、女1 出て行く。足音高く退場。再びテーブルライトの明かりのみ。)

女2 : (呟くように。) それができたらね。それができたらね。

(照明、じょじょに暗くなりながら、)

(発掘作業中) (戯曲とか? 没めも断片) (保土ヶ谷時代?)

(発掘作業中) (戯曲とか? 没めも断片) (保土ヶ谷時代?)

2016年8月18日 リステラス星圏史略 (創作)

A : しかし本当に底が抜けたようにこれは鳴るな。

B : ...百八つだ。

A : え?

B : 百八つですよ。この時計は108回、時を打ったんです。

「ガラスの花の咲く頃に」 (たぶん保土ヶ谷時代?)

「ガラスの花の咲く頃に」 (たぶん保土ヶ谷時代?)

2016年8月18日 リステラス星圏史略 (創作)

故・三浦真由美へ。

ガラスの花の咲くころに

柗実真紅

よくデパートやみやげ物屋ギフトショップなんかで一匹五百円とかで売っている、あれだ。白と黒とか、ピンクとか緑とか、二～三色のガラスをひねり合わせるようにして作ってある、猫に小犬、アヒルに白鳥、凝ったやつだと極彩色の孔雀。マーブル模様の箸置きなんかも、ある。

両親がそういった小間物を作る工房の主。兄が宝石類の彫金師。義姉はリボンフラワーの店を持っている...と、なれば。

門前の小僧とはよく言ったもので呉谷俊兵(くれたに・しゅんぺい)は、およそ手先を使って綺麗なものを創り出す技にかけては天才的ですね、と、その点だけは、どの先生も口をそろえて誉めるのだった。

たとえば、指名されて黒板の前で何か書かされたあと、ぼーっとした顔でまあたらしいチョークを見つめていたかと思うと、立ったまま(どこから出してくるのか)細い釘で表面に模様を刻みはじめ、

- ・しゅんぺの説明(アホではない)
- ・そのしゅんぺが教員玄関でゴソゴソやってること。3月14日。
- ・面談室で108つのボンノーの救済をはかる高田としゅんぺ。
- ・ねこのまり子の首輪と、上村先生のげたはこ。
- ・上村先生にしゅんぺをとりもちに行く、あほな高田。
- ・高田の高校時代の告白失敗談のこと。(詩のあんしょー。)

・上村センパイの誕生日のこと。

...先生方の高校時代、郷愁。

...上村さん未亡人となった時のこと。

...おこのみやき屋で大泣きした時のこと...

・一回転して夕焼けのグラウンド。

・一周忌があけて黒いジャージを脱ぐまり子先生。

「次の誕生日にはあの詩を聞かせて下さい」

・「結婚式は、質素にやるの。出戻りですものね。」

・指輪は しゅんぺ が作った。

~~~~~

上村先生＝未亡人

高田先生＝上村センパイのもと後輩

ガラス細工の生徒と108のぼんの一

ガラス細工の春麗

ガラス細工の咲くころに

「ガラスの花の咲くころに」

塔見くんのこと。

---

塔見くんのこと。

MT.

塔ノ見くんはコロコロしている。

外見は、メガネをかけた、かっぷくのいいタヌキといったところだ。

男としては少々脂肪細胞の育ちすぎかもしれない。

女のふとめであれば可愛いとも言えて、それなりに許せないこともないのだが。

塔ノ見くんの痩せられないのにはわけがある。

けっして美食のたぐいの悪癖は持たないし、日々の運動量というのも結構あるのだが、ただひとつ困ったことには、仮にも食物であるものを、粗末にすることなど出来はしないのだ。

だ、ものだから塔ノ見くんは何でも食べる。

吉野家の牛どんの友達の食べのこしも最後までたいらげるし、レストランの使いまわしのパセリであろうと、24時間営業の店のあまりにも塩のききすぎたミネストローネであろうと、ラーメンの汁、フライドチキンの軟骨、彼女が製作課程を50分ばかり間違えた木炭のような手作りケーキでも、およそ彼のムチムチとした肉のとりまく頑丈な二重顎で消火しうる限りのものは、文句も言わずに黙々と飲みくだしてしまう。

目の前に残されたものを食べさせてもらえないで、捨てると脅されると、そのもんったいなさが悲しすぎて往生してしまう。

~~それは、彼が、熱心なボランティア青年であるところからきた、こだわりであるらしいのだが、  
そんな人の良い塔ノ見くんであれば、しょっちゅう人に陥れられたりもする。  
いやこの言い方はすこし過激かもしれないが、~~

結局押しの弱さは生存権への

競争の弱さによるもので、

自分が十分に強いのなら、それは

仕方がない。当然の譲歩と

いえるのだが、

どちらかといえば人より弱い体を

かかえての それなのだ。

気力だけは それなりに勝って  
いるらしいのが幸いといえ  
言えただろう。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201702231812088004/>

[...まずは断片的な \(もはや意味不明の\) メモ類...。 \(^^ ;\)](#)

(設定資料)

---

(設定資料)



「お正月の空の上」 (中3)

---

「お正月の空の上」 (^^;)

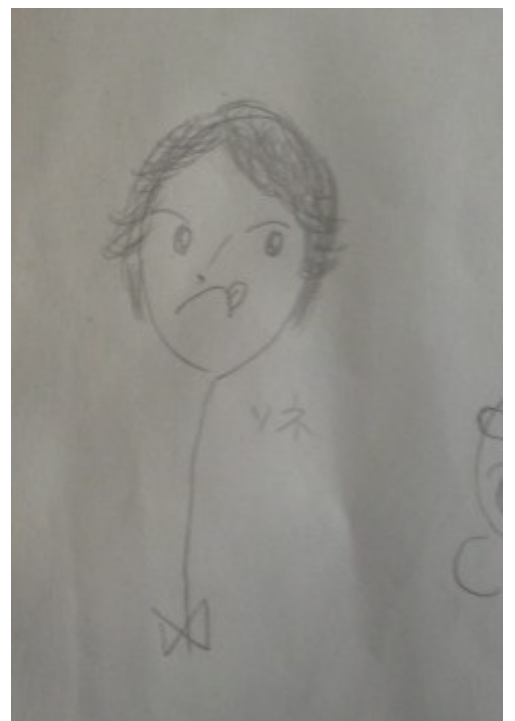
2017年4月27日 リステラス星圏史略 (創作)

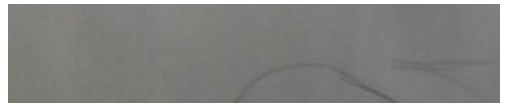
中3の受験が終わった後?の授業中のラクガキで...

ソネちゃんはクラスメイトで、

卒業前に身内ネタで4コマ漫画を描こうとして...

お笑いなネタが揃わずに没になったキャラ設定...☆





(借景資料集)

(借景BGM集)

---

(借景BGM集)

リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
3 - 5 - 9  
『出立の種類』

<http://p.booklog.jp/book/109122>

著者：霧樹里守  
is 土岐真扉  
as 柗実真紅

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109122>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109122>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ